

# 音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024.05.10 定有堂書店 発行

本棚を共有する

「本のある場所」日記 二〇二四年四月  
いよいよ船に乗る

商店街で「無いものねだり」

可能性は無量大!

本を作る側から (14)

汽水のほとりから (38)

お前は賭け事に向いていない

タイトルの妙、妙なタイトル (後)

鳥取あれこれ その九十三

八代日記 (四十八)

他人は他人、自分は自分、ですけれども

ぬか漬け

ご案内

..... 編集後記

奈良 敏行

南陀楼綾繁

岩田 直樹

木元 健二

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

トラメリア



## 本棚を共有する

奈良 敏行

(定有堂 主人)



三砂慶明さんをモデルーターに、角田光代さんとわたしと三人、鳥取県立西高で「なぜ人生に本が必要なのか」というテーマで語り合った。(二〇二四、三、二四)

きっかけは角田さんの新刊『方舟を燃やす』(新潮社)の主人公の一人が鳥取西高出身という設定だったからだ。テーマは二つ、一つはこの本の読解、もう一つは以前角田さんが西高生に「本をたくさん読んで下さい」と色紙に書いて与えたことだ。その「読書」が二つめのテーマ。

本の帯には「信じる」ことの意味を問いかける傑作長編とある。小説の醍醐味は皮膚感覚で伝わる文章表現にあり、「信じる」ことをめぐる日常の危うきは十分読者を納得させるものだった。しかし優れた作品は読後に考えることを強いる。考えるとは概念化すること。概念化すると小説の外部に踏み出して大きな視野で考えることとなる。

いまはマイナンバーカードの時代だ。個人があつて国家がある。中抜き時代が始まっている。そんな状況を背景にし

た小説だ。人の心に「空白」が生まれ、この「空白」に耐えられない人間が増えていく。こんなとき何かを「信じる」と一挙に全体が見通せたような気になる。一つの文化を与えられるとそこにへばりつく。そしてカルトにとり込まれる。

心の「空白」に大きな答えは必要ない。空白をあたためる小さな言葉にたくさん出合えればいい。

小さな答えは本の中にある。角田さんの本の中で、一番西高生に読んで欲しいのは『さがしもの』(新潮文庫)だ。本を読むことをテーマにした短編集だ。西高の多くは大学へ進む。そこでどんな本とのかかわりがあるか。

「なぜ人に本が必要なのか」、「この『さがしもの』の世界はこの問いに、「共依存」と答える。

《本棚の本が似ていたって恋は終わる。》

「本を読むのは、もっとも特殊に個人的」。それでも「本は人を呼ぶ」。心の空白は閉ざされた心に生まれる。しかし扉が開けば他人の空白と出会い、それは「ふつう」になる。

《カップル双方の共通項である「ふつう」(略)、ふたりのあいだでだけ「ふつう」が形成される。しかしそれは最大公約数のふつうであって万人には通用しない。》

そこには二人だけの愛の世界というものが存在する。そして「ちゃませ」に一体化するために「本」がある。愛に希望を抱く人は「本」が必要なのだ。

《たがいの本を交換し、隅々まで読んでおなじ光景を記憶すること。記憶も本も「ちゃませ」になって一体化している》  
しかし恋人たちはいつか別れる。本棚を共有することによって生まれた共依存の蜜月は引き離されて終わる。この心の傷は癒やされることはない。

読書は社会の常識を学ぶ場所ではない。常識を壊し根拠のない主観的信念つまり奇妙なドクサも形成する。読書は人をスタンドアローンにしていく。人とのつながりを手放していく。自己形成とはそういうものだ。そんな中で、人を愛することは共依存になることだ。

本は人を幸せにはしない。

しかし幸せでない人には本が必要なのだ。

セミナーの最後に、「それでも大学に入ったら恋人と本棚を共有してみたいですか?」と問うた。三人の女生徒が手を上げた。目に力のある三人だった。質問したのにはある企みがあった。読書する人は、人生のある瞬間に思いがけない出会いを必要とする。この出会いは人生を変える。わたしはなぜか間違つて『さがしもの』を二冊購入していた。この思いがけなさを誰かに刻印したかった。三人に更に問うた。「定有堂に一度も来たことのない人?」。一人いた。彼女にこの本を贈った。手渡されたものは何事かであったかもしれない。

2024.4.24

奈良敏行十三砂慶明

『町の本屋という物語—定有堂書店の43年』 作品社 2024

角田光代 『方舟を燃やす』 新潮社 2024

角田光代 『さがしもの』 新潮文庫 2008

奈良敏行十三砂慶明編

『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』

作品社 本体2200円 46判上製

定有堂教室案内サイト (@ドรามェリア)

ISBN978-4-86793-013-7

発行 2024.2



# 「本のある場所」日記 二〇二四年四月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

4月6日

「げんげ忌」会場である谷中の全生庵へ。今年で三十四回目となる詩人の菅原克己(一九一〇〜一九八八)を偲ぶ会。判りやすい言葉を使いながら、心に深く届く詩を書いた。私は二十年ぐらい前だったか、世話人である作家の小沢信男さんの誘いで、参加するようになった。菅原さんに詩を教わった生徒だけでなく、菅原の詩「ブラザー軒」に曲を付けて歌った高田渡のファンなどさまさまな人が集まるので、風通しのいい会になっている。小沢さんの没後、初めての参加になる。

今年には仙台文学館で開催されたイベントの報告や、『げんげの花の詩人、菅原克己』(書肆侃侃房)を上梓した金井雄二さんの話があり、後半ではミュージシャンの佐久間順平さんが、「美しい夏」「たからもの」などを歌った。

終わってから、そのまま家に帰るのがもったいない気持ち

ちになり、行きつけの喫茶店に寄る。いつもは午前中に行く私が夕方に姿を現わしたので、店の奥さんに「珍しいですね」と云われる。珍しいついでに、いままで頼んだことのないウイスキーハイボールを飲みながら、さっき買った本を開いた。

4月25日

石巻へ。二〇一三年の設立時から関わっている〈石巻まちの本棚〉へ。私設図書館であり、新刊書店であり、古本屋であり、ギャラリーであり、トークイベントなどの会場でもある。

書店員、作家、イラストレーター、編集者など、本に関する仕事に携わっている人を講師に迎える「本の教室」は、二〇一五年から続けている。その人の活動について話を聞くだけでなく、後半では参加者も一緒に考えたり手を動かしたりする、ちいさなワークショップを行なうのが特徴のひとつだ。

第二十一回のテーマは「わたしの研究、自分の中に楽しむを見つける」。講師は七十五歳の神山恭昭さんだ。神山さんは愛媛県松山市に住み、働きながら、文章を書いたり個展を開いたりしている「自称 絵日記作家」だ。松山の創風社出版から出ている『わしの新聞』『わしの研究』

は、いずれも手書きの文字と絵で構成されている。姫路で『へらへらつうしん』を出している岩田健三郎さんといい、北九州で裏山書房を営み、『ふろく』という本を書いた山福康政さんといい、私はこのような、「手づくりによるおじさんの自主メディア」が好きなのだ。

二〇二二年には神山さんを追ったドキュメンタリー映画「ほそぼそ芸術 ささやかな天才、神山恭昭」（品川亮監督）が公開された。それを機に、それまでほとんど四国から出なかつた神山さんは、映画の上映に合わせて県外に足を運ぶようになった。石巻でも昨年、上映会が開かれた。今年には旧著からのセレクションで、『決定版 わしの研究』が小学館から刊行されることを記念して再度石巻で上映会があり、神山さんもいらつしやるということで、急遽「本の教室」への出演を依頼し、快諾していただいた。

神山さんと初めて会ったのは昨年末だが、旧知のように話ができる。どんな人でも接し方が変わらないから、神山さんの周りには人が絶えないのだろう。

前半では、神山さんが身の回りのささやかな出来事を楽しみながら研究してきた経緯や、それを続けていくために大事なことを伺った。後半では、八名の参加者が「わたしの研究」ネタを考え、壁に貼った模造紙に書いていく。寝言、カラス、割り箸、石など、どうでもいいようなことを

マジメに考えてみるのが面白い。神山さんのコメントも5-温かく、すぐく貴重な時間を共有できた。私はこのところ、なんとなくやる気が起きず、屈託の多い日々が続いていたが、神山さんと会うと元気が出る。ただの空元気かもしれないけど。

4月29日

谷中・根津・千駄木エリアで開催する「不忍ブックストリートの一箱古本市」。今年で二十四回目。コロナ禍で二か所に絞っていた会場を五カ所に拡大し、出店箱数も四十まで増やした。一日中いい天気で、午前中は暑いくらいだったが、午後からは風が吹いて涼しくなる。私は自転車で会場を回っていたが、いろんな人から声を掛けられる。なかには、地方からこのために来た人も多い。

昨年、不忍ブックストリート実行委員会の代表が、私からへひるねBOOKSの小張隆さんに交代した。新体制に代わったことで、会議などもスピーディーになった印象がある。私はちよつと離れたところから見守っているつもりだが、案外これが難しい。気づかないまま「老害」化するのだけは避けたいものだ。

# いよいよ船に乗る

—洋上での「転向」(五)

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人)

## 三 船に乗る準備

プレートテクトニクスの研究対象であるプレートは一年に数センチしか動いていない(太平洋プレートは八センチ、フィリピン海プレートは五センチ)。量子力学の不確定性原理などは適用不可能である。古典力学的世界観、すなわち研究者Ⅱ主観が研究対象Ⅱ客観を模写する図式に従いさえすれば、仮説を検証することができる。

今では中学校教科書に載り地震のニュースで頻出のプレートテクトニクスは、その当時、提唱され始めて二〇年ほどしか経っていなかった。世界中の研究者たちが精力的にデータ収集・解析を行って理論を検証している最中であり、その結果、ほぼ定説になりつつあった。(拙稿「日本における科学革命の一例—プレートテクトニクスの拒絶と受容—」、定有堂ホームページ「今月読んだ本」二〇〇八年九月三日掲載、を参照されたい。)

『音信不通』第九一号で、一九八四年一月に卒業研究を提出してから暇だったので映画を観たりベルクソン『時間と自由』(原著一八八九年、白水社一九七五年)を読んだりしていた、と書いた。このとき本屋でこの本を手にとった。いなかっただらう、私が哲学や思想に興味をもつことはなかったらう。西太平洋上での「転向」の伏線になったと言えるかもしれない。(『時間と自由』をどこで買ったのか全く思い出せない。当時よく行っていたのは八重洲ブックセンターや日本橋の丸善、神田小川町の三平堂書店だった。それとも大学生協書籍部だったらうか。)

皆さんは「西太平洋」と聞いて何を連想するだろうか。今の私であれば、真つ先に「クラ」交易を想起する。マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』やモース『贈与論』で有名になり、文化人類学の入門書や教科書で必ず解説されている基本的概念だ。贈り物と奉仕の相互関係を部族間で行うことによつて暴力・対立を昇華させる実に巧みなこのシステムは、人類の智慧として、富の消尽を部族間で競い合う北アメリカのポトラッチと比較して論じられることが多い。

レヴィーストロースは、若き日の研究生生活を綴った名著『悲しき熱帯』(原著一九五五年、中公クラシックス、全二巻、二〇〇一年)を「私は旅と探検家がきらいだ。」

と始めた。知の巨人を持ち出すのは甚だおこがましいが、当時の私は同様に旅に全く興味がなく、むしろ嫌いだった。「とにかく面倒くさいな、なんとかして行かなくてもよくなる理由はないのだろうか」としか考えていなかった。(『悲しき熱帯』冒頭の続きは「それなのに、いま私はこうして、私の海外調査のことを語ろうとしている。だが、そう心をきめるまでに、どれほどの時間がかかったことか！私が最後にブラジルを去ってから十五年が過ぎた…。」)

まず、パスポート取得が面倒だった。住民票は鳥取のままだったから、そのただけに帰省しなければならぬ。受け取りは本人しかできない。鳥取県庁に書類を提出した後、いったん下宿に帰った。海洋調査の準備を手伝わなければならず、受領まで自宅でのんびり過ごすわけにいかなかった。県庁で受け取るために帰省しとんぼ返り。貧乏学生にとって、東京・鳥取を国鉄で二往復はかなり痛い出費だった。

私たちの船は、東京港晴海埠頭を母港とする全長八六メートル、三六〇〇トンの白鳳丸。名古屋港で一般公開されている南極観測船ふじが全長八三メートル、四一〇〇トンなので、調査船として当時は標準的な大きさだった。(一九八八年に進水した二代目白鳳丸は全長一〇〇メートル、四〇〇〇トンで少し大きくなった。)

晴海埠頭は都心に近く、歌舞伎座の前を走る都バスで、銀座から一〇分ほど。お台場、レインボーブリッジ、東京タワーが望める絶景ポイントである。

航海の準備は大変である。夕方にもなると有名なデートスポットに変貌するベイエリアに、土日も関係なくトラックで荷物を積み込む。最初は仲のよい恋人たちが羨ましかったが、何日も通っているとそんなことはどうでもよくなってしまう。

当時、白鳳丸は毎年約一八〇日の航海を行っていた。インド洋、南氷洋、太平洋横断なども行うので、四五日間の航海は長くはない。『海洋底地球科学』(東京大学出版会一九七七年)、『深海底で何が起きているのか―灼熱海底から日本沈没まで―』(講談社ブルーバックス)などの著作がある指導教官の小林和男先生は、それまでに通算三年以上も海上で生活していたので、「大した航海じゃないよ」とおっしゃる。

それまで船に乗ったことがあると言えば、浦富海岸(山陰海岸国立公園、世界ジオパーク)のグラスボートくらいだった。フェリーですら乗ったことがなかった私は、初めての船の生活で何が起るか想像もつかず、不安が募るばかりであった。

## 商店街で「無いものねだり」

木元 健二

(新聞記者)

からりとした匂いが漂ってきた。商店街の店先で茶葉を焙煎する店からである。

「ほうじ茶は低カフェインです 赤ちゃんにもどうぞ」

そう書き添えられ、ほおを寄せ合う母子のイラストもかわい。懐かしい芳香とあいまって、ほっこりした。

三年暮らした山陰・松江を離れ、四月から横浜の下町で暮らしている。サラリーマンの転勤である。ご近所に賑わう商店街があるのにひかれ、すみかを決めた。

横浜橋通商店街。地下鉄の最寄り駅から徒歩すぐ。戦前に始まった、全長約三百五十メートルのアーケード。全国を覆う「シャッター商店街」の影など、なんのそのだ。

約百二十店が軒を連ねる。最盛期に百三十七あった店舗は一割ほど減った。人出もコロナ禍前の七割ほどにとどまっているというが、往來を歩いているだけで、店々の放つ活力に元氣をもらえる感じがする。

魚屋だけでも多士済々。マグロ、蟹などの主役級の品をめいめいがそろえる。イチゴや柑橘類だけでなく、トゲトゲしたドリアンにグリーンのパナナが鎮座する果物屋。総菜屋にはチキンライスに天ぷら、ひじきの煮物が並ぶ。点心やチヂミ、ベトナム風バゲットサンド(「バインミー」というらしい)を扱う店など、洋服に生花、時計に古美術と多彩な店が並び、ここで求めれば、人生で訪れるたいていの場面が演出できそうな気さえする。

三十数年前、初めて独り暮らしをした京都・伏見でも、商店街が生きていた。伏見大手筋商店街という。近鉄や京阪の駅からすぐのところから、四百メートルほどの、だから坂にのびている。

青い香りを放つ露店で、おばちゃんがミカンを抱え込む。甘いにおいは、たい焼きの店。京都市にあつて、京(みやこ)ではない。横浜橋通商店街と同じく、飾らないのが魅力だが、そぐわない地名があつた。

銀座町。東京・銀座の繁栄にあやかろうと全国各地にできた「○○銀座」とは、わけが違ふ。関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が一六〇一(慶長六)年、初めて全国統一の銀貨をつくろうと鑄造所を設けた、文字通り銀座発祥の地だという名残だ。元祖・銀座として知る人ぞ知るところ

で、かつて東京・銀座の老舗「伊東屋」のご主人とも交流があったという。そんな由来は、新聞記者になってから取材で知った。

学生だった私はいつも懐が乏しかったけれど、ドリツプで淹れるコーヒート、タバコは切らさなかった。たいして本も読まないくせに、読書に欠かせない、などと粋がっていたのだ。商店街のタバコ屋で、時折お洒落な帽子をかぶっていたご主人とおしゃべりをしたのも懐かしい。

「よう勉強して、早よう嫁はん、貰いや」

やさしく諭されたものだ。はんなりした京都弁だったせいか、鈍なる者は助言をいかす機を逸した。

高度成長時代を謳歌した、サラリーマンのコセガレのせいでろう。働く、といえは会社勤めで、起業することなど思いも寄らなかつた。それどころか転職も考えたことがない。今のようにコマーションで女優さんがポーズを決め、「ビズリーチ!」と転職をおすすめするなんて、正直言うとは、隔世の感がある。こんな世の若者に、終身雇用など流行らない。それが実際なのは、頭では分かっているのだが。

一方で、サラリーマンとしては個人商店や、職人仕事の世界にあこがれを抱いてきた。月給取りの、無いものねだりなのは分かっている、ただ四の五の言わず、「おれの仕

事」をしゃきつと追い求める後ろ姿は、いかにも頼もしい。横浜橋通商店街の息吹に力を感じるのも、そのせいだ。

思えば二〇〇六年春、赴任が決まった鳥取に家を探しに行った時もそうだった。顧客の書き癖に合わせた、カスタムメイド万年筆をつくる「万年筆博士」との出会いである。鳥取駅前に構える店に入ってみると、やはり、いい。著名作家の操るブランド品に手を伸ばしたこともあったが、速筆・悪筆の凡人の手には余った。

それが博士の万年筆は、はなからペン先が紙の上を泳ぐように研いでくれるではないか! 職人芸に一目惚れして、注文した。それも2本、しかもすみかを決める前に。

こんなけつたいな中年男をおもしろがってくれる主、山本雅明、竜父子のいぎないで、私は鳥取ならでは人と出会い、時に風土に包まれることができた。

まあ、いいトシこいて、目先の楽しいことを追うばかりで、やらねばならぬことを先送りする。この悪癖は直らない。引越してから一ヶ月たつても、狭いアパートに段ボール箱が三十個余り、積まれたままである。

# 可能性は無限大！

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

YouTubeをぼんやり眺めていたら、「AI×Canvasでショート動画がたくさん作れる！毎月〇万円の収益化も可能！」と、目がチカチカするサムネの動画がおすすめされてきた。ようするに台本をAIに書かせて、あとはいい感じの動画作って再生数稼ぎましよう！ということらしい。Canva（キャンバ）とは、ウェブ上で簡単に画像や動画が作成できるデザインツールで、多くの機能が無料で使える。新しいツールの使い方を覚える良い機会だと思いい、試しに作ってみた。

ということ、九段の動画に素直に従って、まずはいくつかあるテーマから、「心の軽さの秘訣」を選ぶ。AIが答えやすいように質問する必要があるので、割と細かく指示を出す。

落ち込んだ時の対処法について、ショート動画で使用する文章を作成してください

・対象年齢は二〇代前半から三〇代前半

・形式はタイトル・「驚愕の事実」・その裏付けを二つ・

共感した人へコメントを促す、の五つで構成

・タイトルは二〇字以内、各場面の文章は五〇字以内

・Excelの形式で出力

出てきた結果は、「相手が落ち込んでいるときは無理に声を掛けたりせず、話を聞いてあげたり、そばにいてあげるだけで十分」というもの。心理学の知見を薄めた自己啓発本をさらに薄く引き伸ばした内容だが、とりあえず作ることが目的なので不問とする。こんな感じであと一〇個作ってくださいとお願ひすると、同じような薄味の文章がちやんと出てくる。

次に動画作成。背景は満天の星空。タイトルは常に表示されるように一番上に配置。次は、文章が画面に見やすく収まるよう、フォントサイズや改行位置を調整。文章が次々に入れ替わっていくだけなので、難易度は低い。

あとはフリー音源のBGMをくつつけるか、動画をアップする際に今流行っている曲を流すかして完成。初心者で操作方法に少し手間取ったため、一時間近くかかったが、目的は達成できたので、何かに活かそうと思う。

参考にした動画の後半では「フォロワー数を増やして動画をたくさんアップすれば企業案件も可能！」このやり方

自体を販売すればさらに売上アップ」と続く。

ティックトックにこの手の動画が大量に流れていて、コメント欄やプロフィール欄に誘導してくる。どれもそこそこの再生数といいね！を稼いでいる。でもバズっているレベルには達していない。どこことなくウロボロスの輪を、いやそんなカッコいいものではなく、タコが自分の足を食べている姿が思い浮かぶ。

やっていることは全く共感しないけど、流行に飛びつくスピード感やお金を稼ぐことへの貪欲さは、自分には足りない部分だ。いろんな意味で勉強になった。

#### 参考文献

原田隆之『心理職のためのエビデンス・ベイスト・プラクティス入門―エビデンスを「まなび」「つくる」「つかう」』金剛出版

心理学とは、聞いた数分後には忘れてしまうちょっといい小ネタ、ではない。科学的であることと、患者に寄り添うことは両立するという当たり前のことを、事実と経験でレクチャーしてくれます。専門用語も多いですが、一読の価値あり。ちなみに、覆面で心理学の豆知識を披露するティックトッカーがオススメしていて興味を持ちました。

平木典子『アサーショントレーニング さわやかな自己表現』のために』金子書房

版を重ね三訂版まで出ているロングセラー。アサーションとは、自分の権利も相手の権利も大切にしながら、自分の考えを丁寧に伝えること。歴史や考え方などがメインですが、これを読んで人と対話するときに変に身構えることが減りました。心理的安全性ともつながっています。

東畑開人『聞く技術 聞いてもらう技術』ちくま新書  
ケアをひらくシリーズの『居るのはつらいよ』（医学書院）がとてもよかったです。この文章を書きながらそういえばこの本も書いておられたなと思いつきました。なので、これから読みます。

#### ご案内

二〇二四年五月十八日(土)オープン予定

定有堂ビル2階で古書・新刊の本屋を始めます

(SHEEPSHEEP BOOKS)

店主 高木善祥

# 本を作る側から (14)

村瀬 謙介

(小取舎)

夜中に目が覚めて、三島由紀夫の生涯が気になり、長い長いウィキペディアの文章を相関人物の頁と行き来しながら読み、割腹に到達したのは朝の五時だった。少々頭が重い。以前は二時や三時まで無意味に起きていたが最近の日が変わるまでに寝ているのだ。睡眠不足ではない。内容のせいだ。

私は読む速度が遅い。よいいどん、と人と競ったわけではないが、遅い方だと思う。速読を習得できる本を読んだこともあったが、その本すら読むのが遅かった。これは目の動きや視野角がどうこうということではない、単に内容に対する理解が遅いということなのか。小取舎の次の本の校正にも時間がかかっている。以前、音信不通で書かせていただいたが、校正には色々な視点で読まなければならず(読むと見るを同時に行う)、そもそも時間がかかる。本の内容で私の知らない事象が多いとなわざわざ時間がかかる。

理解ができないと間違っても見つけられないからだ。これまでの本が大抵、時間がかかっているということは、新たに理解する必要がある内容の本ばかり出しているからで、もちろん私の浅学も自認している。学びを得られる本が好みだからこれはもう仕方がないと割り切ろう。

岩田直樹氏の『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈―生活世界における公共性と倫理―』を刊行した昨年と同じ月に、三砂慶明氏が司会の読書会が開かれた。その際、参加者が持参した同書には数多くの付箋が付けられていた。職業、性別、年代も異なる参加者が誰に言われるわけでもなく各々、気になる箇所に付箋を付けまくり、メモで本を汚している。その付箋の量に圧倒されたのもあるが、本を汚して読むという読書の仕方には少々嬉しさを感じた。

校正時に私がしたことを、購買者が、いわゆる製本された完成品に行う。自分の場合、ビジネス書や脚本の書き方なんて本にはメーカーやメモ書きなどをしたことはあるが、それは情報を買う類の本であるからであって、それ以外の書籍は極力汚したくない人なのでハツとした。これは最高の読書体験であって、こういう読み方を最近していないなあとも思った(書き写したり、パソコンに打ち込んだりは

していた)。本をメモで汚すということは正しい読書の方法だと思うが、その本を人の前に出すことがあまりない。読書会以外にあるのだろうか。

教科書的な位置に定めれば、それは自ずとどの本でも教科書になる。最初から大事な箇所にはマーカーが付けられていたり、言葉の意味や注釈が付けられている書籍も多い。付録に付箋をつけて売ろうか。そんな考えも浮かんでくる。

その読書会以降、小説でもエッセイでも学術書でも気になった箇所には書き込んでやろうと思った。著者や登場人物と同意があつたらその考えを、対立する意見があればそれを書き込む。やってはいけないが内容と全然関係のない日常を書き込んで良いかもしれない。ここまで読んだという日付を書き込んで良い。もう葉はいらない。血肉になる上に、自分の思考もそこに記すというなんと効率の良いことか。誤読した場合にも証拠が残る。あとで読み返した際に誤読に気づくことがあれば、それは己が成長したということである。

ちなみに岩田先生には言っていないが、私は『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』(の原稿)を初めて読ん

だ時には、YouTubeを駆使した。主要な登場人物の多くは13。既にテレビ番組で特集されアーカイブが残されている。一般の詳しい方が丁寧かつ簡潔にまとめた説明動画もある。観てから読むと理解が早かった。そして一章、二章、三章とページを進めていくうちに理解が加速していく。

読み方は自由だ。読む時間、場所。寝つ転がつて読んだり、台所で読んだり、五月に入つて気候もよくなつてきたので外で読んだり。

紙ではなくパソコンやタブレット、スマホで読む電子書籍、音読で聴くオーディオブック。これらが一般的な読書として認められてきた。映像でも良いではないか。なぜこれだけブックにならないのだろうか。ブックの概念とは一。

橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈  
岩田直樹

# 汽水のほとりから (38)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

前号で紹介した米子市在住の写真家 庄司丈太郎さんについて、あらためて記したい。「御自宅に知り合いの講師を招いて勉強会を定期的に催しておられる」と書いたが、その会の名を「小さなギャラリー—Sowling+話しを聞く会」という。「小さなギャラリー」と名づけたのは、文字通り、自宅の一室に自身が所持する絵画や彫刻などの美術品を展示公開されているからだ。という、なんだか金持ちの道楽のように聞こえるかもしれないが、それらは作家自身や友人知人から寄贈されたものばかりだそうで、言わば、彼らと真剣に対峙した結果の戦利品のようなものである。

庄司さんは昭和21（一九四六）年、米子市の生まれ。

地元高校に進み、在学中にクリスチャンである賀川豊彦、矢内原忠雄、内村鑑三の全集を耽読。とりわけ賀川豊彦に心酔し、将来は彼のように牧師をしながら地域福祉活動や協同組合運動に尽力する人になろうと考えて、卒業後、神

戸のキリスト教の学校に入学した。ところが、牧師らと伝道に訪れた大阪の釜ヶ崎で貧しい子供たちから献金をとる学校側のやり方に抗議し、停学処分になってしまった。いったん帰郷して数年過ぎすが、昭和43（一九六八）年、あの子供たちと出会い直したいと考え、単身再び釜ヶ崎へ向かった。二十歳過ぎの青年は、以来その地に住みつき、宿暮らしのまま日雇い労働で生計を立てるようになった。数年後に迫った大阪万博の工事現場で働き、稼いだお金であるの貧しい子供たちを甲子園に連れて行ったそうである。

写真家としてのキャリアは、釜ヶ崎で貧しい生活をするようになってから始まった。大阪の写真専門学校に入学。その動機は撮った写真を子供たちに見せて喜ばせることだったという。その翌年には「カメラ毎日」に写真を発表。その後、全国各地で青空写真展を開催するようになった。庄司さんには写真家としての流儀がある。被写体になってもらう人とは先ずは時間をかけて親しく付き合う。だから普段はカメラを持ち歩かない。釜ヶ崎に取材に訪れた記者が子供たちとただ遊んでいるだけの写真家の姿に呆れたという逸話も残っている。が、庄司さんにとって、それは良い写真を撮るためにどうしても必要な時間だったのだ。

その頃、庄司さんは鳥取の八頭にコミュニオンが出来たと聞きつけ、数ヶ月滞在している。前に書いたことがある

が、徳永進らが主導した「私都(きさいち)村」がそれである。そもそも戦地から帰国し、戦後は社会党员として農民運動に取り組みながら、武者小路実篤らの「新しき村」に憧れを抱いていたという父親の影響下で育った庄司さんには、理想的なコミュニオンを実現する夢が昔からあったらしい。が、「私都村」の滞在は長くは続かなかつた。庄司さんが失望したのは、主導メンバーの中にマスコミに癒着しようとする人々がいたことだという。見切りをつけた庄司さんは、早々にそこを立ち去るが、それでも共に暮らした人々の姿を収めた写真は今でも大切にされているようである。

昭和47(一九七二)年には、本土復帰を控えた沖繩へ。コミュニオン実現の夢は、そこで一つの形になった。自身で「うちなあの家」と名づけた生活共同体がそれで、今度は自身がオーナーになり、無料で借りた一軒家を運営した。とはいえ、釜ヶ崎の時と同じく、子供たちと一緒に遊び、無料で勉強も教えたというから、ほとんどボランティアである。そのうちその親たちも訪れるようになり、住み込みの家族は30人くらいに増え、その共同生活が一年半ほど続いたという。反戦平和運動に参加しながら、沖繩もまた庄司さんにとって故郷と呼べる場所になったのであった。

ところで、御自宅を初めて訪問した際、私が『論語』を

講義していることを知り、孔子の教えとは何か尋ねられ、たことがあった。その時、私はだいたい次のように答えた。「孔子の教えは、キリストと同じです。恐らく仏陀も同じだろうと思います。彼らは他者を愛せ、これだけを言った。理解するのは易しいが、実践するのは難しい教えです」。庄司さんはその時ただ静かに笑っておられた。今も敬虔なクリスチャンである庄司さんに対して、私の真意のほどは果してどのくらい伝わっていたのか、半信半疑であった。

庄司さんに薦められ、沖繩の偉人、阿波根昌鴻(あはごんしょうこう)の『命こそ宝』(岩波新書)を読み、次の一節を発見したのは、その数ヶ月後のことである。曰わく、「キリスト教が一番いいといって、他の宗教は間違っているという人がおります。またお釈迦さまの話をして、仏教以外を悪くいう人もおる。わたしはそういう人たちからは学ばない。キリストや釈迦や孔子はどういう生き方をしたのか、何を願っておったのか、そこを学ぶという風に考える」と。あの時、庄司さんはこの一節を思い出されていたのか。否、たとえそうでなくとも、この発見によって私は、真意は伝わっていたと確信でき、大いに喜んだのである。



があった。市長も時折加わって市政記者らと「ポンチー、ツモ」などとやっていた、と先輩から聞いた。

私の親父も、まさにそんな時代の新聞記者だった。

国鉄がまだ健在だったころ、鉄道記者クラブの慰安旅行では用意された専用列車で国鉄の幹部らとマージャンをしなから温泉に向かう、という今では信じられないようなサービスがあつたらしい。また警察署長の官舎でサツ記者らがハラを探り合いながら署長と賭けマージャンの卓を囲む、というのも日常茶飯事だったという。

まあ、金が目的ではない。ひとつは相手のハラを探る、または相手がどんな性格の人間なのか見極めるのが目的。もうひとつは、いつ事件が起きて社から呼び出しがあるか分からないから、それまでの時間つぶしである。パチンコもしかり。

当時の新聞記者にはもう一つ特権があつて、映画館に入りが自由だった。これも時間つぶし。私も私の妹も、産まれた時、親父は映画館にいた。



そんなこんなで、高校時代、新聞記者を志すなら…と各種の博打に手を出した。バカだねえ、全く。こいこい(花札)、ポーカ―(「ローマの休日」でグレゴリー・ペック

記者がすってんてんに負けたヤツ)、そして正月、覚えたてのマージャンで親父と初めて手合わせした。

結果は、お年玉全額を巻き上げられ、完膚なきまでの敗退。そして親父は厳かに私にこう告げた。

「お前は賭け事に向いとらん。負けると熱くなるからだ。もう一生、賭け事はするな。身を滅ぼす」

「本当のギャンブラーはな、ぎようはいいい勉強をさせていたできました。ありがとうございます」と言つて、さつときびすを返すものだ」

その言いつけを実は半世紀、ずっと守り続けている。だから今の私があるのかも知れない。勝ち負けが絡むとすぐカツと熱くなる性格は自覚している。

親父は結局、家が傾くほど買った本代と飲み屋のツケで一千万円近い借金を残してこの世を去ったが、このアドバイスだけは今も感謝している。そして「賭博禁止」とは建前で、賭けマージャン、パチンコ、競馬・競輪・競艇、スポーツくじまで、巷にギャンブルが溢れかえっている日本にカジノ(大阪IR)はいらない、と思つたのだ。

## タイトルの妙、妙なタイトル（後）

ムラカミヒロミ

（フライング・ブックマン）

子供向けのライト翻訳本は、これにも増してユニークで、半ば判じ物のような作品さえある。試みに、次の原作がお分かりだろうか。

（承前）

「怪奇雨男」

『深夜の謎』

『恐竜の世界』

『宇宙怪獣ゾーン』

「怪奇の黒猫」

「影を殺した男」

ミステリ、ファンタジー系ばかりで恐縮だが、

「雨男」はデイクスン・カーの「銀色のカーテン」。雨

男の怪奇って…何。怖いんだか、怖くないんだか。

『深夜の謎』は、ドイルの『緋色の研究』。他に付けようがなかったのですかね。事件は、普通、真夜中に起こるものだろうに。

『恐竜の世界』もドイルの『ロスト・ワールド』。この辺りはストリートでいいけれど。

『宇宙怪獣ゾーン』は、ちよつと難物。ヴァン・ヴオークトの『宇宙船ビーグル号』である。まあ、宇宙生物のオン・パレードですからね。

「怪奇の黒猫」は引つ掛けかしらん。ポーではなく、ストーカーの「牝猫」。

「影を殺した男」もシャミツソーではなく、こちらがポーで「ウィリアム・ウィルソン」。

当たりましたか？

御年配の方には懐かしい、かつて、カバヤ児童文庫というのがあった（筆者も、リアルタイムでは接していないのだが）。キャラメルに添えられた応募券を集めて送ると、本を一冊送ってくれるという非売品の文庫で、一〇〇冊を超え大叢書であった。

これが、珍訳・珍題の宝庫で、詳しくは、岡山県立図書館の〈デジタル岡山大百科〉で御確認いただくとして、

ひとつ、ふたつ紹介しておこう。

『怪潜艦X』

『怪人二面相』

正解は、是非、右記サイトを御覧になってくださいまし。

昭和の学習雑誌（「〇年生の学習」とか「中〇コース」とか）には、文庫より更に小さいサイズの「名作文庫」の類が別冊付録で付くことが多かった。

日本作家の書き下ろしもあったが、翻訳ものの方が圧倒的であった。サイズもページ数も決まっているから、当然の如く抄訳である。時に超訳、もはや創作というようなものさえあった。かてて加えて、題名もなかなか興味豊かである（笑）。

『進め！宇宙船ひばり号』

『空とぶオランダ船』

前者は、E・A・スミスの「スカイラーク」シリーズ。いや、その通りなんですがね。そういえば、この「スカイラーク」を「美空ひばり」と訳した人がいた、と筒井康隆が書いていましたな。

後者は、いつぞやのカミの『エッフェル塔の潜水夫』。

日本のミステリにも面白いものがある。

『美しき鬼』は、海野十三の『蠅男』。ちよつと吃驚なトンデモ作品だが、確かに、原題では面白くない。むしろ、映画になっている外国作品（ジヨルジュ・ランジュラン原作）の方が思い浮かぶかも知れない。

『白い羽根の謎』は、江戸川乱歩の『化人幻戯』。これは、大人だつてよく分からん。妥当と言うべきでしょう。

乱歩の大人物に『恐怖王』というのがあるが、児童向けにも『仮面の恐怖王』というのがある、歴としたオリジナルの少年探偵団もの。で、窮余の一策、『恐怖王』のリライト版には『恐怖の魔人王』という題名が付いた。まあ、何だ。

『黒蜥蜴』が『黒い魔女』になり、『妖虫』が『赤い妖虫』になるくらいならいいんですがね。『悪魔の紋章』が『呪いの指紋』に、『吸血鬼』が『地獄の仮面』になる、というのは、如何なものだろう。

## 鳥取あれこれ その九十三

内田 克彦（地域研究家）

（承前）

再刊された『鳥取新聞』が、翌年の一八八一年二月二十六日付で休刊した後、『山陰新報』が、同じような陣容で、鳥取県再置を最大の目的とする共斃社を発行所として、同年七月二三日付で発行された。

『新修鳥取市史 第五巻』には、次の記述がある。

『山陰新報』は、〔同年九月に〕鳥取県再置という目的を達成した後、明治一五年春頃自然休刊となったが、同年秋再刊され、〔略〕断続的ながら明治一六年三月八日の第一一〇号まで続いている（『鳥取県史』近代 第四巻）。

昨年夏、県立図書館で開催された特別資料展「鳥取と新聞」に、『山陰新報』が展示されていたため、所蔵先の県立博物館に出向き、『旧鳥取藩士田中俊民家資料』の中にある、一八八二（明治一五）年一月一八日付の第七九号から、翌年三月八日付の「休刊の旨趣」が載る第一一〇号まで（途中、八三〇九二号を欠く）、三日間隔で発行され

た『山陰新報』の現物を確認することができた。興味深い記事が載っていたので、次に掲げる。

○松本正直氏 同氏は当地土族にて會て「ママ」思案橋の一件に付禁獄七年の処刑を受け久しく獄裡に呻吟されしも去暮特赦の恩命を蒙り出獄されしか去る五日農商務省御用係静岡岡県山林局出張所詰を命ぜられ月給六十円を下賜さるゝと〔九八号、明治一六年一月二八日〕

「思案橋事件」の松本正直については、以前から関心を持っており、二〇一五年に、河内山雅郎さんから自費出版本『会津悲憤の思案橋事件 英傑竹村幸之進俊秀の生涯』（二〇〇九年刊）を送って頂いていた。

彼は伯耆国東伯郡国坂村の出身、鳥取藩国家老和田信夫家来松本茂左衛門養子、天保十二年〔一八四二〕生。幼名多一郎。〔中略〕  
佐倉連隊大隊長永田秀藏陸軍少佐は、松本の知人であった。

ここで、「鳥取藩国家老和田信夫」とあるのは「和田信美」の間違いではなからうか。調べてみる必要がある。

一〇二号（明治一六年二月六日）には、「去る二日漸く来鳥 犬養毅」の記事が載る。犬養は、前年に大隈重信を党首として結成された立憲改進黨の党員であった。

一〇二号（明治一六年二月九日）には、「孝子喜三郎」の記事が載り、足利喜三郎（妙好人因幡の源左、のこと）が紹介されている。

また、岡崎平内の記事も出て来る。

○県会議員上京 来月一日より東京にて開らく県会議員有志者懇親会に列席の爲め当県よりは岡崎平内中井静雄田中政春岩本平太の四氏が明廿六日上京さるゝ由  
〔一〇二号、明治一六年一月一五日〕

○岡崎平内氏 同氏は兼て上京中なりしが此頃何故か改進黨を辞して帰鳥せられたり又同氏は当地に私立法律学校を設立せんとて専ら尽力中なりと聞きたり如何にや  
〔一〇九号、明治一六年三月五日〕

さて、一一〇号（三月八日）に載る「休刊の旨趣」は、

次の記述のとおりである。

一ヶ月十回位ヒノ発売ニテハ時事多端ノ今日ニ応スル能ハサルヲ以テ更ニ一ヶ月十五即チ隔日ノ発売トナシ漸次毎日ノ発売トセシメテ計リ且ツハ従来ノ用紙ヲ廢シテ之レ西洋紙ト改メ〔略〕

現今社運ノ次第二旺隆ニ赴クニモ拘ラス茲ニ休刊ヲ告クル所以ノモノハ斯ノ旺隆ヲシテ前途益々旺隆ナラシメントノ目的ナレハナリ

『鳥取県史』によると、一八八三（明治一六）年六月二八日に創刊された『山陰隔日新報』は、『山陰新報』の印刷設備を譲り受け、隔日新報社には山陰新報にいた人が多く、両紙の間には血の繋がりがあった、記事も山陰新報の続編を載せている、とある。『山陰隔日新報』は『山陰新報』の後継紙として、「隔日」発行としたので、「隔日」の文字を入れたものと考えられる。

因みに、この『山陰隔日新報』の創刊号が、現在まで続く『日本海新聞』の第一号である、とされている。

（以下、続く）

二〇二四、四、二四

# 八代日記

(四十八)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン)

元長崎書店勤務)

四月某日

なんと長崎次郎書店が150周年の折りに休業するとの話をSNSにて知る。無念。本店の店長やKさんにメールをする。いろいろと事情はわかったがショック。なんかぼつかりあいた心の穴。引き継ぎます、と言いたいのだが、ピンボだもんで本が並べられない。うーん。悲しいというよりなんだか焦りがある。借金して会社員辞めようか。でも根性もない。

四月某日

3歳の次男が発熱。三日下がらなかつたので病院に行ったら溶連菌ではないか、との診断。薬をもらって帰宅。が、翌日も翌々日も、昼は少し下がるのだが夕方から40度近い熱が出て、眠っても泣き叫びながら夜中に起きたりするので何か違う病気かもと長男を実家に預けて熊本赤十字病

院の夜間救急に行く。

ドクターがリンパ腺の触診やらを割としっかりしてくれている。丁寧な先生で良かったなと思っていたが、「川崎病の疑いがあります」とのこと。妻が昨日くらいからその可能性を疑っていて少しインターネットで調べたりしていたが、それまで全く知らない病気だったしまさか違うだろうとも思っていたが、「すぐ入院するのを勧めます」と言われ、治療のことや入院のことまでは調べきっておらず、こりや大変だとなる。以下、国立成育医療研究センターのサイトより引用。

「川崎病は1967年に小児科の川崎富作先生が最初に報告した原因不明の病気です。4歳以下の乳幼児に多く、全身の血管に炎症がおきていろいろな症状が出ます。高熱、両側の眼球結膜の充血、真っ赤な唇と母のようにフツツツの舌、体の発赤疹、手足の腫れ、首のリンパ節の腫れの9つの症状のうち5つ以上の症状があれば川崎病と診断します。小児おちおちさんではBBGを注射した場所が紅く腫れ上がることも、特徴的な症状の一つです。「困るのが次の点で、「川崎病にかかると一番問題なのは、心臓を栄養する血管である冠動脈に動脈瘤を形成することです。川崎病にかかったおちおちさんの約2%になんらかの瘤ができてしまいます。冠動脈に瘤ができてしまうと、将来的に血管が狭くなっ

たり、血栓で冠動脈が詰まったりして、狭心症や心筋梗塞を起す危険性が高まります。特に大きな冠動脈瘤(8mm以上)を残してしまった場合は、心筋梗塞を予防するために一生、血液が固まりにくい薬を飲み続けなければなりません。「治療としては「まず免疫グロブリン」と呼ばれる血液製剤を点滴で投与し、血液を固まりにくくするアスピリンというお薬を内服していただきます。」「これと同様の治療方針で行くとの説明を受け、付き添い入院を妻がすることとなり、次男は看護婦さんに連れられ、採血と点滴の準備へ。親がいると注射がしづらいとのことと離れ離れ。向こうから泣き叫ぶ声が聞こえてきてつらい。入院に関する説明や手続きを行い、ひとり帰宅。

四月某日

翌日に子と妻の着替えだとかの入院セットを詰めて病院へ持参。感染症対策で会うことはできず入口にて渡すのみ。寂しい。長男と一緒に実家に泊めてもらう。免疫グロブリンの投与を始めたとの連絡を受ける。次男も寂しくなったようでLINEのビデオ通話がかかってきたが、早くうちに帰りたいと泣いてしまった。

四月某日

入院四日目、点滴の効果か次男の熱は下がったが、妻が発熱。風邪だと思われるが、風邪が次男に移って発熱すると川崎病の再発だかどうかかわからなくなるので、できればお父さんが替わって下さいとのこと。自分の荷物をまとめて妻とチェンジ。

ママのいない寂しきで眠くなると「ママがいい」と泣いてしまう。なんとかあやして一緒に三泊。熱は下がり、エコーも問題なく無事に退院できた。二週間後、3ヶ月後、半年後、1年度、以降は1年に一回5年間は要検診とのこと。

病院食は美味しそうだったが、自分には出ないので売店の弁当ばかり食べて太ってしまった。

四月某日

四月はライブを入れなかったし、仕事がバタバタしたり子の入院で心を落ち着けることができず、なんだか体力も落ちているしスタジオに入る元気もなく、ライブ続きだった先月までが遠い昔のよう。こうやって人はバンドをやめたりしていくのだろうか。六月は楽しみなライブがあるが、うまく演奏できるのだろうか。鍛え直さねば。

## 他人は他人、自分は自分、ですけれども

『夜明けのすべて』を観て

三浦 永理  
(青翔開智中学教員)

映画『夜明けのすべて』を観てきた。昨年の五月に三宅唱監督の作品をJig Theaterで観て、そこがかかると聞いてから、他の場所で観るのは我慢していた。

原作は、瀬尾まいこ氏による小説。PMSを患う藤沢さんと同じ職場にいるパニック障害の山添君を中心に物語が進む。二人は「持病」という事情を抱えて生きているのだが、それを理由に周りに迷惑をかけてしまうことがある描写が続く。急に人に怒り出してしまう藤沢さん。パニックの発作が起きてしまう山添君。最初は「こんな人周りにいたら、びつくりするな」などと思って観ていて、そんな自分の心の狭さと、他者を受け入れたいという思いとの葛藤を覗き見る時間だった。

藤沢さんは、山添君がパニック障害を患っていると気づく前、「やる気のない後輩」だと思っている。山添君の方も、かつて勤めていた企業と比べて、「やる気のない職場」だと思っている。そのとき、彼らはまだ真実と向き合っていない。自分以外の人にも、背景があることを知らずに過

ごしてしまっている。

最近、周りの人を見ていて、自分を追い込んだり、私なら「居心地がいい」環境もふとした瞬間に、辛い環境になることもあったりするのだと思った。例えば、仕事における新しいチャレンジに怖気付いてしまって、普段の生活もままならないような人もいる。それが私にとっては魅力的に見えるようなチャレンジでも。あるいは、私が辞めてしまった体育会系の業界にも長く勤めている友人はいる。

自分は自分、他人は他人で、耐えられるストレスは違う。が、誰かが苦しんでいるとき、「大丈夫だよ」「頑張ろう」と声をかけてしまう自分がいる。よくないと思いつつ、どこかで本当にそう信じてしまう。その人なら大丈夫なことがほとんどだし、時間が経って嵐がさるのを待てば、落ち着くことが多い。適度なストレスが成長をもたらすこともある。そんな思いが、それぞれの人の背景を無視した一言になっていることもある。

一方で、自分のことはどうしようもないけれど、助け合うことはできると気づくのが、『夜明けのすべて』に出てくる藤沢さんと山添君の関係だった。傍目から見ると男女として「いい感じ」に見える二人だが、本人たちはそんな

な気はない。今までの物語なら、そんな二人でも近づいていくのが定石だとは思う。しかし、そうはならない。家族でも恋人でもないのに、二人はお互いの病気による苦しみを静かにケアし合う関係に変化していく。

社会は、ケアする関係を求めている。家族と職場以外のサードプレイスを求めている。弱みを見せて、助け合えるような場所が、世の中にはなくなってしまうのか、元からなかったのか。いずれにせよ、ある点とある点の行き来だけでは生まれないものを求めている。

『サードプレイス』（みすず書房）のオルデンバーグは、アメリカの都市生活、すなわち車社会がそのように居心地のいい・家から歩いていけるような場所を奪ったことを指摘している。回復するために「家にひきこもる」ことを求める社会。そんな社会に生まれ落ちてしまった私にとって、サードプレイスは奇妙で新しく魅力的な概念だが、そんな居場所がピンとこないはまだ。

東京出身の私は、鳥取に来るまで、点と点の移動で満足していた。地元には友人はいない。学校または職場と家を往復していた東京での生活から、コロナ禍で職場と家を往復するだけの鳥取の生活に入ってしまった。今までの私は、そんな点と点の移動でいいのではないかと割り切っていた。

おそらく、そんな往復の中でも、心地よく生きられて25-  
いるのは、『夜明けのすべて』の藤沢さんのような気持ちで働いているからかもしれない。

「働かないと生きていけないし、仕事があれば毎日することもない。だから会社に勤めている。けれども、仕事のもたらすものはそれだけではない。自分のできることをほんの少しでも、何かの役に立ててみたい。自分のなかにある考えを、何らかの形で表に出してみたい。そういう思いを、仕事は満たしてくれる。働くことで、漠然と目の前にある大量の時間に、少しは意味を持たせられる気がする。」

『夜明けのすべて』の二人の関係は、職場の同僚を少しだけ超えて、それでも家族ではなく、友人というサードプレイスとして機能しているのだろう。助け合うことで、あるいは仕事をすることで、社会とのつながりを保ち、意味を見出すことができる。それがほのかな日差しとなって、劇中の二人を照らしている。

そんな人が君の隣にもどうか現れますように。  
それが私でなくも、私であっても。

## ぬか漬け



とうとうぬか漬けに手を出した。ぬか漬けは好きだ。実家のぬか漬けがことのほか好きで、盆と正月の帰省時にしか食べられないことが耐えがたく、長年自分で漬けることを検討してきた。が、踏み切ることができなかった。理由は簡単だ。自分の不精ぶりを嫌というほど知っているからである。毎日ぬか床をかき混ぜる、なんて、自分でできるわけがない。このことについては、確固たる自信があった。

毎日かき混ぜなくてもよく、手軽にぬか漬けを始められるジップ付きナイロンバッグ入りぬか床の存在を数年前に知り、これならばもしかして、と、重い重いわが腰がほんの少しばかり上がりかけた。だがそれでも、やらない理由を見つける方が簡単だった。「週に一度」まで譲歩された、「かき混ぜ」の頻度すら困難な課題のように思われたし、その課題をクリアしたところで、私の食べたい実家のぬか漬けを再現できるわけではないと、心の中の不精がさきやきかけた。

実家のぬか漬けで一番好きなのは、大根の皮のぬか漬けである。大根の本体(?)の部分もちろんおいしいのだが、皮の味わいは、ぱりぱりとした歯ごたえも含めて格別だ。以前も書いたとおり、ぬか漬けだけでなく、大根の皮が好きで、いくつか気に入りの食べ方がある。ほかの根菜と一緒に刻み、ウインナー(かベーコン)やバターで炒めた玉ねぎと煮込んで塩胡椒で味をつけたシンプルなおスープ。塩もみして水気を切り、レモン汁、胡椒、オリーブオイルで味付けした和え物。皮以外の部分は、おでんや煮物、大根おろし、みそ汁の具としてよく使うので、食べる皮には困らない。どころか、今年は特に、ときに持て余すほどで、こんなとき、ぬか漬けというカードがあれば、とうすらぼんやり天を仰いだ。思い返せばそんなふうには、ぬか漬けを求める気持ちが少しずつふくらんできていた。

最後のひと押しはテレビ番組だった。ぬか漬けのよいところが取り上げられたのは、ほんの数分だったのだが、「よし買おう」と即断した。

それからいくらか経たないうちに、先述のぬか床がお得に買える週間がやってきて、ぬか漬け生活が幕を開けた。

最初に漬けたのは、やはり大根の皮だった。持て余し

ていたのです、すぐにぬか床に入れることができた。そして、薄いのですぐに漬かった。

自分で漬けた大根の皮のぬか漬は、実家の味とは違った。でも、やはりおいしかった。ぬか床を買ってよかったと早々に満足した。

しばらくは、ぬか漬にできるかどうかというその一点で野菜売り場を物色した。気になる野菜は、都度「(野菜の名前)「ぬか漬け」でググった。その結果、大概のものはぬか漬けにできるとわかったので、今では平常心で野菜を買う日常を取り戻している。

なすやきゅうりは、ぬか漬け界のレギュラーといった感があるが、期待を裏切らぬ旨さで、改めてその存在の大きさを(私に)知らしめた。れんこん、ごぼうは、それぞれに味わいが全く異なる。れんこんはねっとりとしていて少し癖があり、ごぼうは本来の風味がぬか漬けによく合う上、歯ごたえも野性味があつていい。たまたま見つけた芽キャベツとラディッシュも漬けてみたところ、どちらも食べやすく、瞬く間に「ぬか漬けにして食べたい野菜ランキング」上位に躍り出た。以来、また出ていやしないかと野菜売り場できよろきよろしている。

ぬか漬けとは、野菜を洗い、適当な大きさに切ってぬか床に入ればよいものと思っていたが、野菜によって、下準備をした方がよいものがあると知った。前出のれんこん、ごぼう、芽キャベツは、ぬか床に入れる前にレンジで温める。なすは塩でもむとよいとか。まだまだぬか漬け一年生。学ぶことが山ほどある。

と謙虚に書いてみたが、すでに「かき混ぜ」の頻度が低くなりつつある。ぬか漬け二年生に進級できるよう精進したい。

イラスト あきの素生

## 二案内



ドラマメリア (座敷わらし)

定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

5月28日 火曜日 19時から

テキスト 岡野原大輔「大規模言語モデルは新たな知能か」

ChatGPTが変えた世界」岩波科学ライブラリー

会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

6月13日 木曜日 19時から

テキスト 木田元『現象学』 岩波新書 (前回続き)

会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室 「読書室ヒオトープ」小説を読む会です

5月16日 木曜日 第16回 19時から

テキスト ケストナー「飛ぶ教室」新潮文庫

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

大極拳教室 (葉香クラブ) 会場 ニ力所

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時から 市役所 麒麟スクエア

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員 (ナラ)

三段 公認B級指導員 (みちる先生)

定有堂教室案内サイト

(@ドラマメリア)



・編集後記:

現職場は前任校から数百メートルとご近所なので、生徒たちと窓口でよく顔を合わせます。「本当にいる！」と驚かれたり、「顔を見に来ました」と言われたり。わかからぬことばかり、というかわからぬことしかなく、右往左往する四月でした。

ドラマメリア (編集長)

『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』、朝日新聞書評欄「著者に会いたい」でご紹介いただきました。木元健二記者です。『「好書好日」で全文読めます。また、『「ダウンチ」でも「さくら」が紹介。感謝。』

奈良敏行 (発行人)